

— ランスとシャルトルを訪れて —

テロ直後で厳戒態勢のパリ市内を離れ、ランスとシャルトルへ出かけました。そこでの時間はほっとできるひと時でした。



ランスの大聖堂は 13 世紀の教会ゴシック建築の傑作とされ、歴代フランス王の戴冠式が行われ「王の街」と呼ばれた由来となっています。大聖堂随所に施された優美な彫刻やステンドグラスの数々、また奥にあるシャガールブルーと称されるシャガールのステンドグラスも圧巻です。左扉にある微笑みの天使の彫刻は珍しいほどの笑顔が特徴的で、思わず微笑んでしまいます。その後、サン・レミ聖堂と美術館も見学しました。夕方にはクリスマスマーケットも開かれ、街は賑わっていました。ランスはシャンパンの名産地でもあり、次回はぜひシャンパンカーブ巡りをしたいものです。



シャルトルはパリ展会場で現地の方に“ステンドグラスをしているなら是非行くべき”と勧められ行ってきましたが言葉通りでした。シャルトルの大聖堂はロマネスク様式の塔と 12 世紀の大火事で焼失し再建された 16 世紀のゴシック様式の 2 本の塔が左右非対称で特徴的です。彫刻とステンドグラスは当時の最高の職人達が結集した傑作です。「シャルトルブルー」で知られるステンドグラスはどれも見逃せない至高芸術です。隣接の国際ステンドグラスセンターの受付には事務局より作家協会パリ展の案内と会員紹介パンフを置かせていただいておりました。ここは大聖堂のステンドグラスの解説や火災にあったオリジナルのガラスが保存

されており、近代作家の作品の展示もあり見学しました。この日は寒さと雨でいにくの天気でしたが、帰りに大聖堂の全景写真を撮っていると莊厳な鐘の音が鳴り響き、心温まってパリに戻りました。



文章・写真

ステンドグラス工房 アトリエ M 滋野 昭江

2015 年 12 月 14 日(月)、東京都美術館・スタジオにてフランス・パリ展の報告会を開催しました。

第 8 回通常総会の開催

2016 年 5 月 23 日(月) 13 時より、東京都美術館・スタジオにて開催予定です。

ホームページのお知らせ

<http://jsgaa.org/>

昨年 11 月のパリ展を始め、これまでの展示会の模様を「映像」でお楽しみいただけます。ぜひご覧ください。

レポートでご紹介したサンゴバン社のガラス製造の様子もございます。「映像」のページより [フランス・パリ用 MOVIE](#) をクリックしてください。

— 編集後記 —

先日、鹿児島を訪れ薩摩切子を見てきました。同じガラス工芸とは言っても普段自分が作っているものとはまた違うガラスの魅力に出会えたいい時間でした。写真はショップ内に飾られていた薩摩切子の豪華なお雑様です。



本協会への入会、お問い合わせは事務局及び各会員までお願いします。

発行日 2016 年 3 月 10 日

発行者 日本ステンドグラス作家協会

(事務局) 〒108-0074 東京都港区高輪 4-2-7-201

林 昭子 (アトリエ)

info@jsgaa.org

編集者 〒841-0004 佐賀県鳥栖市神辺町 1589-3

櫻井 由美 (アトリエ Y's COMET) TEL0942-84-5546

編集委員 滋野 昭江 (ステンドグラス工房 アトリエ M)

田所 孝一 (ステンドグラス工房 K.T.)

日本ステンドグラス作家協会 会報誌

JSGaA

第 15 号

2016 年 3 月 Vol.15



睡蓮 Suzuki Takashi

JSGAA パリ展報告



紅葉が街を彩るフランス、パリ15区、パリ日本文化会館において“日本ステンドグラス作家協会パリ展”＜時の流れを経て＞を開催いたしました。(期間：2015年11月17日～11月28日)

この展覧会では、パリ日本文化会館の協力により、地上階全面を会場としてご提供頂き、後援を外務省、在フランス国日本国大使館、また協力企業として10社のお力添えを頂きました。展覧会の案内はフランス国内では、Saint-Just 社のご協力によりガラス関係の案内情報に載せて頂き、パリ日本文化会館からはメディアを通じ展覧会の紹介、各会員もパリ市内関係各所に案内を送付、また現地にて足を運び広報活動を行いました。

出展に関しては会員作品とフランスステンドグラス組合から3名の招待作家による展示を含め展示総数58点、来場者は3517名（カウンターによる）を数えました。



今回はパリ市内のテロ事件勃発の3日後の搬入展示という事もあり展覧会の開催に不安もありましたが、会場近辺は比較的平穏でした。2週間に渡り日常と変わることなく展覧会を開催したことによりフランス政府に対し日本はテロに屈しない姿勢がアピールできた（パリ日本文化会館は公的機関なので、テロのターゲットになる可能性がある場所と考えられる）との声を在仏邦人の方々より頂きました。また、パリ日本文化会館館長の竹内佐和子氏（2016年1月退任）より、「会館にテロの犠牲者の為の半旗を掲げる代わりにステンドグラスによる灯りを燈すことにより、会館として光によるご冥福の気持ちを表す意味を持った」とお話を頂きました。

展覧会の初日には開場と同時に Saint-Just のヴァレリー社長、そして在仏日本国大使館より樋口公使、大島一等書記官のご来場を得ました。今回の展覧会の来場者の8割はフランス人、そのうち6割が日本文化に興味のある方、その他は、日本のステンドグラスを見たいと足を運んで

くださった方という印象でした。（昨今、フランスは日本のアートに注目が集まっているとのこと）日本にステンドグラスが渡った時期、いきさつについてのご質問、日本人作家がガラスを繊細に扱い組み合わせることへの驚嘆、西洋と東洋の融合の感覚、など多くのご感想、疑問、質問を頂きました。この中には、自分のPCのアドレスを芳名帳に残し、我々に宿題を置いておかれた方もありました。この展覧会は日本の現代作家のステンドグラスを丁寧に紹介する意義のある2週間の会期であったと考えております。

事務局として、全会員の協力のもと、日本からは9名が現地に滞在し、全ての作業を滞りなく済ませることが出来ました事を感謝を持ってご報告致します。

文章

事務局長 林 晶子(A工房)

レポート

— リオン・サンゴバン Saint-Just ガラス工場訪問 —

11/22 (日) パリから電車で仏第二の都市リオンへ。

ユネスコ世界遺産、フルヴィエールのノートルダム大聖堂（1643年ペストの流行から救われ感謝して建てられた）を見学。迫力あるステンドグラスに圧倒された。メインの横の礼拝堂で会衆賛美を聞いたが、日本の教会賛美と少し違う音色で、声量や声質の違いの他建物の構造にあるのだろうと感動！床のモザイクがとてもきれいだった。高台から見降ろした街並みが整然として美しく、その後旧市街地を散策。昼食もおいしく、建物の間の狭い石畳み通りに人が大勢でどの店も賑わっていた。立体絵本を2冊購入し小雨の中ソーヌ川沿いの集合場所に走った。

11/23 (月) 朝食後すぐ車で広大な敷地にあるサンゴバン工場を見学

- ・ 代表者のヴァレリー氏事務室の壁一面のステンドグラスが目をひき、会社が1826年創立と読めた。
- ・ アンティークの大きな板ガラスが出来るまでを、用意された靴や装備を付けて見学した。

- 1 吹き竿から息を吹き込みガラスをある程度大きくして形を整える。
- 2 床下が細長く繰り抜かれた穴の中でガラスを振り子のように左右

に振り、時々温度が下がらないよう釜に入れ、息を吹きこみ規定の形に大きくしていく。

3 スタッフが円筒形ガラスを頭上高く持ち上げ徐冷釜に運んで行ったのには驚いた。

4 徐冷後の円筒形のガラスを縦にカットして熱を加える。

5 切れ目を上にした円筒形ガラス（シリンドラー）がコンベアに載って再び加熱釜へ入る。

6 シリンダーがカットした線でゆっくり開いていくのが見え、スタッフが形を平らに整えていた。

7 徐冷後板ガラスとしてローラーに載って出てきて製品の出来上がり。

大変な重労働で、熱くて危険な仕事で、一枚一枚丁寧な手作りだから値段も高いはずだと思った。

- ・ この後大きな棚の製品ガラスを見て見学は終わったがとても充実した内容だった。
- ・ 「昔駅だった」という近くのレストランで昼食にこの地方の名物料理のうさぎの肉を食べた。

パリに夕方着。駅で警察犬を連れたおまわりさんが丁寧に教えてくれたが、どこも銃を構えた警察官、警備員、軍隊、パトカーがいっぱい、多発テロの後かえって守られていると感じた。振り返ればステンドグラスだけでなく芸術全般の歴史、奥深さ、大きさに圧倒された旅だった。私までも「全てが神のご計画、もし今テロが来ても、世界の名画に囮まれて死ねるならそれも感謝！」とルーブル美術館の一室で味わったことのない平安を感じたのは、偉大な芸術のナセル技だったのか？テロの為夕方以後人がほとんどおらず、私一人ゆったり名画鑑賞に浸れたのは通常ありえない事で感激だった。

文章・写真

アトリエ シオン 竹鼻 野菊

